様式３－２

令和8年8月27日

令和8年度　結果の分析及び今後の改善策

（ 中間・最終 ）

広中央中学校区　校番4　学校名　呉市立広小学校

重点	d 中期（3年間）経営目標	e 短期（今年度）経営目標	l 結果の分析（結果と課題をこう考えます）	m 今後の改善策（こう改善します）
★★★ 知	確かな学力を育成する。	基礎・基本の定着	○ベルスタートができる児童の割合は87%で，達成度96%のB評価となった。学校全体で5分休憩の過ごし方の例を示すなど，授業開始を意識できるよう取り組んできた。一方で，授業準備をせずに遊んでいる児童も見られ，自ら授業開始を意識して学習の準備を整える習慣が十分に定着していないことが課題である。 ○学期末テストにおける通過率40%未満の児童の割合は，国語3%，算数2%となり，目標値（国語3%以下，算数5%以下）を達成し，国語100%，算数103%のA評価となった。タブレット学習やUDの視点を生かした授業づくりに加え，朝のスキルタイムや放課後のスマイルタイムなど，児童の実態に応じた指導を継続したことが，基礎的な学力の定着につながった。今後も，個々の児童のつまずきを把握し，実態に応じた支援を継続していく必要がある。	○2学期も，1学期に行ってきた5分休憩の過ごし方やベルスタートに向けた取組を継続するとともに，児童が自ら時間を意識して行動できるよう働きかける。特に，授業準備ができていない児童には個別に声をかけ，授業開始までに必要な準備を意識させることで，自ら準備する習慣の定着を図る。 ○キュビナ等のICTを活用して，一人一人の学習状況やつまずきを把握し，日々の授業や補充学習に生かす。朝のスキルタイムやスマイルタイムについても，児童の実態に応じて内容を精選するとともに，教職員間で児童の実態や効果的な指導方法を共有し，学校全体で組織的・継続的に個に応じた指導を進め，基礎・基本の確実な定着を図る。
		思考力・判断力・表現力の育成	○「ひろっ子学びのスタンダード」を取り入れた授業を実施している教員の割合は，目標値90%に対して90%で，A評価となった。「導入の工夫」や「学び合う場の設定」に多くの教職員が取り組み，「豊かなかかわり」を意識した授業づくりにより，児童同士が主体的に関わる姿が見られた。一方で，「振り返り」を全校で共通した取組として定着させることが課題である。 ○「授業の内容がよく分かる」と肯定的に評価した児童の割合は96%で，A評価となった。UDの視点を取り入れた授業づくりが，児童の主体的な学びや学習内容の理解につながったと考えられる。	○校内研修等で「ひろっ子学びのスタンダード」を再確認し，「導入の工夫」「学び合う場の設定」「振り返り」について，効果的な実践を共有しながら，全校での取組の充実を図る。 ○引き続きUDの視点を取り入れ，「個を大切にした支援の工夫」と「豊かなかかわり」を意識するとともに，児童の思考を深める発問を工夫し，自分の考えをもち，伝え合いながら学びを深める授業づくりを推進する。また，UDの視点を意識した授業を教職員同士で見合う機会を継続して設定し，他の教員の支援や授業づくりの工夫，そのよさを学び，自分の実践に取り入れることで，授業改善につなげていく。
★★ 徳	豊かな心を育成する。	規範意識の向上	「ひろっこみんなのやくそく」を守っていると自己評価した児童は93%で，A評価となった。多くの児童が学校生活のきまりを意識して生活していると考えられる。一方，教職員による評価は84%で，児童の自己評価と約10ポイントの差が見られた。実際に，人との関わり方や休憩時間の過ごし方，頭髪に関することなど，きまりを十分に守れていない姿も見られる。年度初めにきまりを説明し，保護者にも周知しているが，時間の経過とともに，児童が具体的なきまりを忘れたり，意識が薄れたりしていることが課題である。	年度初めだけでなく，学期ごとなど定期的に「ひろっこみんなのやくそく」を確認し，児童自身が自分の生活を振り返る機会を設ける。特に，人との関わり方や休憩時間の過ごし方，身だしなみ等について，具体的な場面を取り上げながら，きまりを守ることの意味について考えさせる。また，教職員間で共通理解を図り，指導の基準や方法をそろえることで，全校で一貫した指導を進める。
		（貫） 自尊感情・自己肯定感の向上	「自分にはよいところがある」と自己評価した児童は86%で，A評価となった。これまで，授業UDの視点を取り入れ，一人一人が学習に自信をもてる授業づくりを進めるとともに，委員会活動等を通して，学校のために活動する機会の充実を図ってきた。これらの取組が，児童の自尊感情・自己肯定感の向上につながっていると考えられる。 また，本校の課題である長期欠席については，30日以上欠席した児童が一昨年度の34名から昨年度は30名となり，4名減少した。7月末時点で比較しても，年々人数は減少している。担任を中心に，一人一人の状況に応じた継続的な支援を行うことで，短時間の登校が可能になったり，他の施設に通うことができるようになったりした児童もいる。一方で，長期欠席の状況が継続している児童もいることから，今後も個に応じた支援を継続していく必要がある。	引き続き，授業UDの視点を生かし，一人一人が「できた」「分かった」という達成感を得られる授業づくりを進める。また，委員会活動や係活動，学校行事等において，児童が自分の役割やよさを実感できる場を大切にするとともに，教職員が児童のよさや成長を積極的に認め，言葉で伝える取組を進める。 長期欠席への対応については，担任を中心に児童一人一人の状況や思いを丁寧に把握し，家庭や関係機関と連携しながら，個に応じた支援を継続する。登校のみを目標とするのではなく，短時間の登校や別室での学習，他の施設への通所など，それぞれの児童の状況に応じた段階的な支援を大切にする。児童全体の自尊感情・自己肯定感を高める取組と，個々の児童の実態に応じた支援を両輪として進め，安心して学校生活を送ることができる環境づくりを進めていく。
★ 体	健やかな体を育成する。	健康の保持増進と体力・運動能力の向上	朝ごはんを食べた児童の割合は97%で，A評価となった。多くの児童が朝ごはんを食べて登校している一方で，食べていない児童については，「朝食を食べる時間がない」「朝食の準備がされていない」など，生活リズムや家庭での朝食環境に関わる要因が考えられる。また，「いきいきチャレンジ週間」では，アンケートに回答していない児童や，目標に向けた取組が十分にできていない児童も見られた。「早寝・早起き，朝ごはん，運動」の大切さについて，児童が十分に理解し，自分の生活を振り返りながら主体的に取り組めるようにすることが課題である。	生活リズムを整えることの大切さや，早寝・早起きの工夫，短時間で準備・摂取できる朝食等について，保健委員会・給食委員会・体育委員会と連携し，児童や保護者への啓発を継続して行う。「いきいきチャレンジ週間」を，児童や保護者が日頃の生活習慣を見直す機会として位置付け，取組の目的や意義を分かりやすく伝えていく。また，「いきいきチャレンジ週間」中の朝の会等を活用し，担任が未回答の児童への声掛けを行うとともに，取組ができていない理由や困っていることを聞き取るなど，児童の実態を把握する。その上で，児童が無理なく取り組める方法を一緒に考え，実施率の向上を図る。今後も，学校全体で「早寝・早起き，朝ごはん，運動」を意識した取組を継続し，児童が自ら健康的な生活習慣を整え，主体的に健康の保持増進と体力・運動能力の向上に取り組めるようにしていく。
		「自分の命は自分で守る」力の育成	災害時の避難場所や避難の仕方について理解している児童の割合は94%で，目標値を約6%下回り，B評価となった。全体として「自分の命は自分で守る」という意識は高まっているが，十分に理解できていない児童への継続した指導が課題である。	残りの約6%の児童を把握し，個別に指導を行う。学期に1回は災害時に避難する場所や避難の仕方を自分で書き，土砂災害対応携帯マニュアルで確認する活動を，朝のスキルタイムの時間に全校一斉で取組む。児童が作成した防災標語を掲示したり，放送したりして，取組の見える化を図る。
業務改善	健康でやりがいのある職場をつくる。	児童と向き合う時間の確保	○「児童と向き合う時間が確保されている」と感じている教職員は86%で，B評価となった。成績処理期間の4時間下校や日課の見直しにより時間の確保につながった。一方で，授業準備等を勤務時間内に十分行えないという声もあり，教育活動をさらに精選する必要がある。 ○ロイロノートやキュビナの活用により，教材提示や宿題，アンケート，提出物の確認等が効率化され，印刷や丸付け，集計等の時間削減につながった。一方で，資料の整理や通信環境等に課題がある。	○「児童にとって必要な活動か」「よりよい方法はないか」という視点をもち，教育活動の内容や回数，方法を見直していく。取組を工夫することで，児童との対話や個に応じた支援など，児童と向き合う時間の確保につなげる。 ○夏休みに，先輩職員から時間の使い方やテストの進め方，環境整備などについて学んだり，実際に教室を見て回ったりする研修を行った。職員それぞれの工夫や実践を共有することで，日頃の業務を見直すきっかけとなった。今後もこうした研修を継続し，職員同士が学び合いながら，業務の効率化や児童と向き合う時間の確保につなげていく。 ○ロイロノートやキュビナ等を効果的に活用するとともに，活用方法の共有や資料の整理を進め，ICTによって業務時間を削減し，児童と向き合う時間を生み出す。
		長時間勤務の削減	定時退校日（水曜日）や18:30退校を意識して業務に取り組む姿は見られるものの，定時退校日について守れていると肯定的に評価した教職員の割合は33%にとどまった。行事や成績処理等の時期には業務が集中することもあり，意識はしていても実際の退校時間の短縮には十分につながっていないことが課題である。	定時退校日や18:30退校を意識し，業務の優先順位を考えながら計画的に進める。また，業務が集中する時期には学年部等で分担したり，教職員同士で声を掛け合ったりしながら，学校全体で長時間勤務の削減に取り組む。